

医学系研究に関する情報公開文書

| | |
|---------|--|
| 研究課題名 | サルコペニアと特発性間質性肺炎(IIPs)との関連性の検討 |
| 研究責任者 | 日本赤十字社医療センター呼吸器内科 出雲 雄大 |
| 研究機関名 | 日本赤十字社医療センター呼吸器内科 |
| 研究目的と意義 | <p>特発性間質性肺炎(IIPs)とは、原因を特定しえない間質性肺疾患の総称です。現在、IIPsは9つの疾患に分類され、それぞれ治療戦略や予後が大きく異なります。各疾患を正確に診断するためには、呼吸器内科・放射線科・病理医による合議(Multi-Disciplinary Discussion: MDD)が、重要な診断プロセスになっています。我々は浜松医科大学病院第二内科を主研究機関とした多施設共同研究を行うことで、データベースを構築しました。</p> <p>IIPsでは慢性呼吸不全とともに高度の栄養障害をきたす症例が散見されます。日常診療ではIIPsの進行とともに患者の体重減少や筋力低下が顕著となり、呼吸機能低下や易感染性に繋がる機会も多いです。昨今、このような筋力低下、体重減少をきたす病態としてサルコペニアが注目されています。多数の慢性疾患がサルコペニアの原因になるだけでなく、サルコペニアがそれらの慢性疾患の増悪、予後因子となることが報告されています。呼吸器疾患においては、COPD、非小細胞肺癌、喘息/COPDオーバーラップ症候群などにおいて、サルコペニアが増悪、予後因子となることが報告されています。</p> <p>しかしながら、間質性肺炎、特にIIPsとサルコペニアとの関連については報告がありません。前述の通り、IIPsはサルコペニアの原因になるとともに、サルコペニアがIIPsの増悪、予後因子である可能性が考えられます。この検証によりサルコペニアがIIPsの予後と関連していることが判明すれば、栄養療法、リハビリテーションなどによる筋力保持、全身管理のようなサルコペニアの治療がIIPsの予後改善に寄与する可能性があります。</p> |
| 研究方法 | <p>●対象となる患者さん: 2009年4月～2014年3月に慢性型特発性間質性肺炎と診断され、外科的肺生検を実施された患者さん</p> <p>●研究に使用する試料: (1)診療録 (2)胸部CT画像 (3)肺病理標本</p> <p>●研究方法 上記に記載しましたデータベースを用いて、サルコペニアの重症度を測定し、サルコペニアが重症である患者さんの予後がより悪いのか否かを確認します。具体的には胸部CT撮影時に確認できる、第12胸椎レベルの腸腰筋、脊柱起立筋面積を測定し、サルコペニアの状態を測定します。統計処理を行うことでサルコペニアがIIPsの予後因子であるかどうか、解析いたします。</p> <p>*なお、本研究で使用するデータベースの情報は、全て匿名化(特定の個人を識別できない)されているため、個人が特定できず、インフォームド・コンセントの撤回があっても対応できません。</p> |